

茅ふきたより

も く じ

- 01 大内宿茅場の維持保全と会津茅手の技能の継承をはかるための普及啓発事業報告
- 02 茅刈り体験研修
- 03 茅葺き体験研修
- 04 茅葺き文化講座

- 08 「全国の茅葺き集落と茅刈りと茅葺きの技」パネル展
- 08 「会津茅手の技と風景」ビデオ製作、冊子製作
- 08 「会津茅手の技と風景」学習会

会からの報告

平成25年度文化庁ふるさと文化財の森システム推進事業普及啓発事業

大内宿茅場の維持保全と

会津茅手の技能の継承をはかるための普及啓発事業報告

2014. 03 第13号



一般社団法人
日本茅葺き文化協会
Japan Thatching Cultural Association



▲大内宿集落



▲大内宿茅場（ふるさと文化財の森）

本事業は、会津地方の茅葺き民家および茅葺き文化の存続をはかるため、茅葺きの素材の確保と茅葺き技術の継承への理解を深めること、茅場の維持保全活動の支援を行いその共同の輪を広げること、茅葺き技能の継承と後継者育成をはかることを目的に事業を実施した。

これらの基本となる茅刈りおよび茅葺き体験研修、技能講習会、茅葺き文化講座、茅葺きパネル展を行い、また、技能の継承をはかるため会津茅手の技を記録し、ビデオ記録および冊子を制作した。

この事業の実施にあたっては、下郷町教育委員会をはじめとし、大内区と重伝建地区大内宿の保存団体である大内宿保存会、茅葺き技術の継承に取り組む大内宿結いの会など、地域の関係諸団体と連携して事業をすすめた。茅刈り体験研修は、ふるさと文化財の森に選定されている大内宿茅場、パネル展示は、大内宿町並み展示館（茅葺き技術研修センター）、茅葺き技能研修は旧大内分校を体験研修の場として活用した。

茅刈り体験研修

平成25年11月17日（日）開催

日時 平成25年11月17日（日）

会場 大内宿茅場（ふるさと文化財の森）

協力 大内宿保存会、大内区、

下郷町教育委員会

対象 中学生、一般市民

参加者 30名

大内宿茅場において熟練者の指導のもと、茅刈りの体験研修を行った。茅刈りの茅刈りの適期、茅刈り方法、束ね方、乾燥方法、保管方法および茅場の維持管理方法を学ぶことで、ふるさと文化財の森である大内宿茅場を維持するための担い手の育成の一助とすることができた。

参加者たちの手によって15駄の茅刈りを行うことができ、地元住民にとっては高齢化や天候不順で負担の大きい茅刈り作業の実質的な助けとすることができた。地元住民にとって若い人の参加は、助けにもなり、また交流にも大きな意義があった。



▲鎌で手刈りの実演



▲地元の熟練者の指導による茅刈り体験研修



▲熱心に刈り取る参加者



▲刈り取り時期を迎えた茅



▲刈り取った茅を背弧に集合写真



▲ニューにして春まで乾かす

茅葺き体験研修

平成25年11月16日（土）開催

日時 平成25年11月16日（土）

会場 茅葺き研修施設（旧大内分校）

協力 大内宿結いの会

下郷町教育委員会

対象 一般市民、茅葺き職人

参加者 30名

大内宿では、大内結いの会を中心に、茅葺き技能後継者育成のため、大内の茅葺き所有者の後継者の若者を対象に毎週技能講習会を行っている。その研修施設にて、茅葺き職人と若手技能後継者の指導のもと、茅葺きの体験研修を行った。参加者は、大学生、研究者、茅葺き愛好者の他、造園職人など計30名であった。初級コースでは、会津茅手の茅葺きの技を市民が体験習得することで、茅葺き文化の理解と関心を深め、より広くその支援者のすそ野を広げ普及啓発をはかる一助とすることができた。さらに中級コースでは、茅葺きに高い関心のある造園職人をはじめとして、茅こしらえから刈り

込みまで、短時間ではあるが熱心に取り組む、茅葺き技術の理解を深めた。さらに、指導する地元の後継者たちも参加者たちも互いの熱心で真摯な取り組み姿勢に啓発され、体験研修を通じて今後の継続が期待できる交流ができた。



▲出来上がった屋根の上に集合



▲茅を並べる



▲縄ないに取り組む参加者



▲ハサミで刈り込む中級者コースの参加者



▲おしよこの縄を締める

茅葺き文化講座

平成25年11月16日(土) 開催



日時 平成25年11月16日(土)

場所 大内区集会所

対象 一般市民、地元住民

茅葺き職人

参加者 40名

茅場は茅資源の供給地として維持管理がされることで、生物多様性の宝庫となり、近年、その草原としての価値が再評価されている。生物多様性について、半自然草原としての茅場の果たす役割や、土壌の違い、その維持保全の意義と方法を主題とした、茅葺き文化講座を開催した。さらに、会津茅手の技術と大内宿でのこれまでの取り組みについて、講座を開催した。

これらによって、参加者および地元住民が、茅場の持つ多面的な意義とその維持保全の意義について、また、大内宿の一年の暮らし、結いのあり方について、理解を深めることができた。また、地元住民と参加者が、相互に情報交換と交流をはかることができた。

「茅刈りが守るちいさないのち
草原がはぐくむ生物多様性」

独立行政法人 農業環境技術研究所

生物多様性研究領域 平舘俊太郎

茅場は生きものの宝庫

茅場の文化的な価値は既にみなさんご存じだが、一方で茅刈りをすることで保たれる生物多様性も大切だ。生物多様性とはいったいなんなのか、簡単に説明すると、ある場所に生物の種類がどれくらいいるか、ということになる。一つの場所に生物が沢山いるということは、生物多様性が高いと言うことができる。逆に生物の種類数が少ないということであれば、生物多様性が低いということになる。食事で例えると、毎日牛肉とご飯だけ食べていると飽きてくる。やはりいろんなものを食べたい、いろいろな味も楽しみたい。同じものばかり食べると栄養も偏ってくるという問題もある。私たち



は生物が沢山いるほうが好きと判断することが多い。それだけでなく私たちの体を保っている栄養は植物をはじめいろいろな生物の恩恵を受けているので、私たちの生活には欠かすことができない必要なものである。「好き」とか「貴重」だからといった価値観とは別に必要になる。私たちの命を支えてくれているのは多くの生物たち、つまり私たちには多くの生物が必要ということになる。したがって、私たちには非常に多くの生物たちと共存する必要がある。直接役にたかない生物、草や虫も大事なメンバーであることがわかる。

日本と草原

ではやみくもに多くの生物を増やせばよいのかというと、そうではない。典型的な里山の風景が残っている場合、集落があったら、その周りに田んぼがあつて、採草地、放牧地、雑木林があり、さらにこちらに植林地がある。それぞれの生態系があつて、それぞれ維持されている。それがその地域の多様性だ。それを混ざていけない、田んぼにいる生物は田んぼにいて、そこに他の生物を混ぜても上手いかわからない。草原に話をもちくと、草原には草原に相応しい生きものがいるのである。

カワラナデシコ、オミナエシ、キキョ

ウ、ヤマジノホトトギス、こういった植物は、綺麗で小さくて可憐だ。それほど長い期間咲いているわけではないが、よく観察すると健気に咲いている。このような日本人の心を揺さぶるような小さい花は人気だ。実は、こういう小さい植物は草原に依存している。

どうして草原でないといけないのか、共通した特徴がある。まず、草丈が低いこと。草原には木が生えない。日本の自然というのは雨が多いので、放っておくと森林になってしまう。草原というのは一時的なフェーズであつて安定的な生態系ではない。それを維持しているのは人間で、草原は自然では維持することができない。つまり、人為的な刈り取りが必要となる。その刈り取りによって春先に草原全体に光が差し込み、背丈が低くて多年生の植物がきちんと生育できるようになる。これが草原の特徴である。

草原面積は国土の20%程度であつた。しかしながら現在では2%を切っている。大内宿周辺のような茅場としての草原だけでなく、耕作放棄地や畔なども含めた面積なので、状況の良い草原は更に少なくなっている。これは、我が国の生態系で最も面積が減っているという事ができる。植物だけでなく他の生物も危機に瀕している。つまり草原を維持することが、絶滅危惧種の助けになる種が多い

ということも意味する。このことから日本の生物多様性を保つためには、なんらかの対策で草原を維持しなければならぬと今盛んにいわれている。

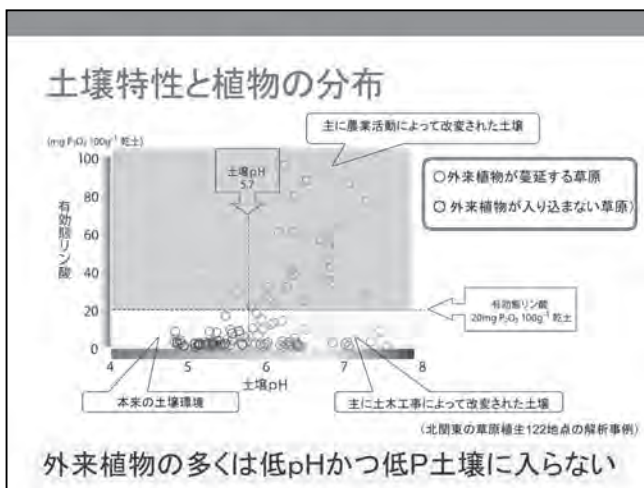
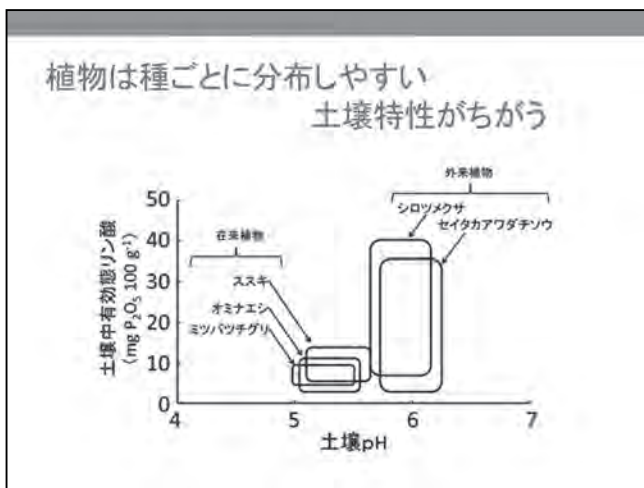
草原減少の理由

なぜ草原の面積が減ったか。大きな理由は草原の需要が無くなったこと。江戸時代は草原から得られる草資源を牛や馬、飼葉、敷き藁に使用し、また堆肥にした後、畑に漉き込んでいた。あるいは屋根材として使ってきた。壁材としても使っていた。そして葉草など食べ物としても利用してきた歴史がある。

しかし近代になってからは牛を飼うために外来牧草を植えればよいということになり、従来型の草原は消えていった。堆肥などの肥料も手間をかけてつくるよりも化学肥料を使えばいいということになった。屋根も瓦屋根に変わり、薬品も化学薬品に変わった。いろいろな要因があるが、大きいのは動力革命にあるのではないだろうか。かつては物を運ぶためには牛を利用してきた。ところが自動車の登場により、物の運搬や畑を耕す役割は大きくかわってくる。牛や馬の役割が自動車にとってかわったのである。牛や馬は草を大量に食べるので、一匹維持するにも広い草原が必要となる。これが不要となると草原減少につながる。草原の

面積がぐっと減ってしまったうえに、セイタカアワダチソウなどの外来生物によって追い打ちをかけられた。

研究の結果、外来植物が好む環境がわかってきた。ではどういう環境か。元々の北関東の環境はpHがやや低く、リン酸も低いという特徴がある。本来の土壤が保たれているところでは、元々の植物の環境が保たれている。本来の土壤を変えた場所、肥料を施すことでリン酸が高い場所になると、外来植物が蔓延する。あるいは土木工事などによって土壤のpHが高くなると、同様に外来植物が入ってくる。ススキ、オミナエシなど草原や



て、茅刈りは土壌をかつての状態に保つ機能があるといえる。茅場は草原の植物たちにとってオアシスである。

草原の維持の現状と課題

日本で一番草原の面積が大きい熊本県阿蘇九重の草原では、ボランティアによる定期的な刈り取りによって草原が維持されている。農業が衰退した今では観光資源としての側面が強いので、積極的に草原を維持しようという状況ではないのである。今は高齢化した農家の方がないとか草原を維持する活動を行っている。このままだと、危機に瀕してしまうので、現在は多くのボランティアが茅刈りや野焼きを行っている。それによって今でも大きい草原面積を維持しているが、明治時代から比べると面積は半分以上になっていく。山口県秋吉台は日本で二番目に大きい草原である。それでも阿蘇の半分以下だ。ここでは草原を維持する主な目的は生物多様性のため。ここでもボランティアによって草原が保たれている。しかしながらボランティアも永遠に続くわけではない。

草原を維持するためには、ボランティアの力も必要であるが、それだけでなく、草原が必要だから、草原が大事、価値があるというふうにならないといけない。

「大内宿の保存と活用

〜地域の力を次世代に〜

大内宿結いの会 吉村徳男

大内宿は、都の風情に似ていることから高倉以仁王山によって本村が大内村と名づけられた。その後、高倉以仁王が亡くなつて、勧請神として高倉神社の氏神様となり祀られている。したがって私たちの心のよりどころは、すべて高倉神社となる。一六三五年、会津の殿様が参勤交代をしなければならなかった際、宿場が必要になり、12の宿場をつくった。大内は会津からくると二つ目の宿場にあたる。殿様が泊まる場所、昼食の場所、当時は庶民も旅をするようになったので、彼らの旅籠の役割、それと宿場から宿場まで荷物を輸送する役割である。昔は馬の背に荷物をつけて運んでいた。戊辰戦争のときに戦火に巻き込まれ、宿場などは焼いて撤退してきた。これも火をつけて焼かれそうになったのだが、時の名主などが燃やさないでくれと懇願した。それで江戸、明治、大正、昭和と現在まで残ってきた。村として間口が6間から7間。奥行が30間から33間で4つの集落が整ったのは一六三〇年代の後半だと言われている。

経済成長と大内宿

会津藩の記録によると、一七一一年に大内で60数件の火災があつたが、それ以降は火災が一切無い。つまり、私たちは三〇〇年以上前に先祖たちが建てた家に現在も住んでいるということができている。先祖が建てた空間をお借りしているので、この家を次の世代にきちんと引き渡すために、茅葺き屋根を守ろう、自分たちの生活文化を守ろう、というふうな活動を現在している。実は大内宿も高度経済成長期に、このあたりでもどんどんダムをつくってきた。同時に茅葺き屋根だった家がどんどんトタンを被るようになり、危機を感じた当時の町長は重伝建に選定されることを目指すようになる。その後様々な努力があつて、昭和56年に重伝建に選定された。

伝統行事と茅葺き屋根

経済成長がすすむにつれて、どんどん人と人の繋がりを絶つような社会となった。そこで、地域のコミュニティをしつかりすれば、もっと茅葺き屋根も増える

のではないかと、村を守っていくことができるのではないかと考えた。そのためには、昔からあつた年中行事を介して、縦のコミュニティ、横のコミュニティ、お年寄りから子供、婦人から青年までを巻き込む必要がある。しめ縄づくりなどもそうである。しめ縄も三〇〇年以上前から続いてきている。お金をせしめ縄を買うことはできるが、つくる技術を継承していかなければならない。すべて経済的なものにしてしまうと、なにもかも無くしてしまう。だから私たちはしめ縄なども勉強してしっかり残している。実は茅葺き屋根を守っていくことと伝統を守っていくことはイコールである。村という社会が一つになっているためだ。

屋根の雪かきもその一つで、三〇〇年前から続いてきている。それに雪をおろさなかつたら重みで家がつぶれてしまうことになる。大内の冬は、今でこそ雪が見たいと訪れてくれる人がいるが、深々と雪が降ると暗い顔をしていた。そこで元気をだそうと、雪まつりが28年前から始まり自分たちでなんとかやろうとなった。今では2日間で1万から1万5千人くらいの観光客が訪れるようになった。28年もやっているのだから当初カップルが、今では子供を連れて訪れてくれるようになった。最初は大きな雪像づくりを目指して仕事帰りに深夜まで作業をしていた

が、無理のない範囲で、各家あたり1個ずつ雪灯籠だけをつくるようになった。素晴らしいのはみんな作り手の顔つきが芸術家になることだ。観光客のためだけにつくるのではなく、自分たちの楽しみとして活動することがポイントである。でないと続けることが難しい。

結い

大内宿の屋根葺きでは結いによって成り立っている。金銭が発生しない、労働力の交換である。うちの親父が手伝つて、お前の息子によって返ってくる、したがって、こういう一つ一つの行事がとても大切になってくる。村では高倉神社でお参りしてからお嫁にいく。子供ができる、きちんとお宮参りをして氏子にしてもらう、そういった流れで人間の一生が大内宿では高倉神社からはじまっている。

村の屋根葺きは、村人の協力で葺いている。みなさん屋根葺きというと、1回で葺き替えるかと思いがちであるが、1回で葺き替えようと思うと、茅もお金も人手も大変だ。そこで、だいたい3分割にする。南側を葺いたら北側を葺く、また5年経ったら西側を葺くなど、複数回としている。葺き替え中の雨が怖いので1回では葺き替えない、これは昔の人の知恵である。

屋根葺きは「平葺き3回、ぐしとり1



「回」という。ぐしとりは、親父から息子から任されて世代交代を意味するめでたい行事である。

我々が一番大切にしなければいけないのは農という景観、自然という景観だ。人工である茅葺き屋根の景観だけを残してもなんの意味もないと考えている。ここには人の暮らしが残ってなければならぬ、という認識が必要だ。以前は田んぼなどが荒れたりしていたが、今では荒らさないようつくっている。

田植えをすれば神様にお神酒をあげる。お神酒を上げたら下げなければならぬ、そしてそれを息子と飲む際、「おめーこの草刈れよ」と上手くコミュニケーションをとるわけだ。こういうの一つにしても家庭内のコミュニケーションだ。高倉神社の半夏祭りでは、高倉様をお神輿に乗せて村へ。村では、どこの地域でもそうであったが、教育力をもっていた。例えば大内の子供達はこの高倉のお祭りにでなければならぬ。そのなかで大人からいろいろなことを教えてもらってきた。そのような教育力を今ではどんどん捨ててしまっているが、この村では意識をもって教育力を保つようにして、子供達を育てている。村の流れがずっとつながっているからこそできることだ。子供達は小学校にあがると火の用心の役を担う。これも教育力といえる。大

人たちが「茅葺き屋根は火に弱いから、火の用心をやつてね」ときちゃんと子供達に伝えていく。そして、ちゃんと見回りが終わったら、村を守ってくれたことに對して、ドーナツを持っていき頭をなでてあげる、そうするとちゃんとやならければ、となるわけだ。

この村では大善院で經典を六〇〇巻買うのに、寄付を募っている。その際、ためがきには「子孫のため」と記す。これは素晴らしいと思うのだが、よくよく考えると子孫のためは自分のためでもある。やがて自分も含めて誰もが亡くなる。子孫がいなくなつてこれない。おれは跡取りがいるから死んでも家にもどつてこれる、そう考える、だから子孫のためは自分のためなのである。こういう風にして村の社会は茅葺き屋根を葺くだけでなく、暮らしを守る活動もしている。単純に茅葺きを守るだけであれば、映画のセットでも構わない。そこに人が住んでいることが大切である。

それは消防部長が訓練をすること、お年寄りが念仏を唱えることにもつながる。村民が亡くなると今でもその家で葬式をしている。私は弾頭をしているので、村のだれかが亡くなると、枕翌日は村にある祭壇で葬式を、翌々日は告別式をして出棺している。村人が集まって送り出す。その人の人生が良い悪いではな

く、その人が生きてきたことを認めて送り出すので、90代のおばあちゃんが亡くなった場合でも30代の若者も葬式に参加する。若者はお年寄りとはほとんど関係がないが、それでも人の死というものをきちんと見送る、そんな村を私は好きなので、残していきたい。

私は45歳で茅葺き職人に弟子入りした。なぜ45歳か。娘が大学へ息子が高校へ進学するときを選んで背水の陣を敷いたから、こつこつと今は一所懸命にやれている。同時に一人前になるまではお酒を断つた。弟子入りして9年目。宇都宮の現場で親方に、「吉村、お前はなんでも酒を飲まない」と聞かれたので、一人前になるまでは絶つていくことを伝えると「じゃあ、今日から飲め」ということになった。そこからは教わるだけではなく、若者たちに技術を伝えなければならぬ。文字で映像で教えて、実技でも教えている。毎週水曜日に皆で集まって練習している。

青年たちを指導していくうえで、一番大切にしていることは何か。例えばポンプ操法の訓練を競う大会があり、青年たちは練習を重ねたが優勝できなかった。優勝はできなかったのだが、私は彼らを MVP とした。この MVP は、ミッシェンとビジョンとパッシェン。要するに、ミッシェンもビジョンも大切であるが、一番

はパッシェン、情熱だ。情熱さえあれば、なんでもできる。彼らは朝4時に起きて15キロはなれた中学校でポンプ操法の練習をして、7時には喜多方で屋根葺きをやつてきた。それを一か月以上こなし、ものの見事に成し遂げた。それは彼らの情熱である。ポンプ操法の練習と屋根葺きの仕事だけでなく、帰宅したら祭りの太鼓の笛の練習も行った。

今では青年たちに任せて後ろについていけばよくなった。これからは青年たち中心に活動してこの村をひっぱつていく必要がある。



「全国の茅葺き集落と
茅刈りと葺きの技」パネル展

日時 平成25年11月16日(土)
12月24日(火)

場所 大内宿町並み展示館
(茅葺技術研修センター)

(ふるさと文化財の森センター)

対象 一般市民、地元住民、観光客
来場者 延べ 2800名

これまで蓄積してきた全国の主要な茅葺き民家、集落のほか、茅刈り、茅葺きの技をパネル化して、パネル展を開催した。茅刈りから茅葺きの詳細な写真によって、材料や葺き方、屋根のかたちの違いを比較できるパネル展とした。

「会津茅手の技と風景」
ビデオ記録、冊子制作

日時 平成25年11月～平成26年3月
会場 大内宿内の葺き替え現場 他

大内宿内の葺き替え現場にて、ビデオ記録を行った。屋根はぐしから、下地直し、軒付け、平葺き、ぐし、ぐしまつり、刈り込みの工程を記録することができた。今回の屋根葺きは、大内宿以外の屋根葺き職人は3名で、大内宿の結いで技のDVDに編集してまとめた。あわせて、「会津の茅葺き 技と風景」冊子を制作した。

「会津の茅葺き 技と風景」
学習会

日時 平成26年3月10日(月)
会場 下郷中学校

講師 小山忠男(茅葺き職人)
対象 中学1年生
参加者 35名

「会津の茅葺き 技と風景」DVDを用いて、地元の下郷中学校にて茅葺き学習会を行った。職人による道具や材料の実物の解説もまじえ、将来の担い手となる子供達に地域の茅葺きについて関心と理解を深める機会とすることができた。



▲葺き替えの様子



▲講師の話を熱心に聞く中学生ら

〈編集後記〉

ふるさと文化財の森普及啓発事業を通じて、秋から冬の茅葺きの大内宿をたびたび訪れた。屋根葺きの現場に通ううち、そこには吉村さんが話された大内の結いの心、受け継がれてきた人々の暮らしがあり、そしてこの風景があるのだと肌で感じた。少々のことでは動じない暮らしの基盤がそこにはあった。(弥)

茅ふきたより 第13号

2014年3月31日発行(非売品)

発行：一般社団法人日本茅葺き文化協会

編集：茅ふきたより編集委員会

一般社団法人日本茅葺き文化協会

〒300-4231 茨城県つくば市北条184

TEL/FAX 029・867・5829

E-mail info@kayabun.or.jp

URL http://www.kayabun.or.jp

◎みなさんの情報をお寄せ下さい！

茅葺きについてさまざまな情報とご意見・ご要望をお待ちしております。

茅刈り、葺き替え情報大歓迎。事務局宛までお寄せ下さい。